未来を開く

青森産技センター報告

——20

資源管理へ刺し網改良

高級魚キアンコウ

大型のみ漁獲、掃除簡単

本県では津軽海峡を中心に、冬場を代表する高級魚・キアンコウが水揚げされる。特に、風間浦村では地域ブランド「風間浦鮟鱇（あんこう）」が全国的に有名だ。だが、漁獲量は減少傾向にあり、本県でもピーク時の2008年の958トンから、15年には298トンと約3割にまで減った。風間浦村でも資源動向に対する懸念から管理手法の開発が求められている。

モデル操業を通じて刺し網の改良試験に取り組む「風間浦村きあんこう資源管理協議会」会員

底魚資源を管理するためには、未成魚を獲らずに保護し、成長してから漁獲することが重要で、キアンコウも例外ではない。

水産総合研究所では、キアンコウの未成魚を保護するために、県下北地域県民局むつ水産事務所や漁業者らでつくる「風間浦村きあんこう資源管理協議会」と連携して、県内で主に行っている漁法・刺し網の改良試験に取り組んでいる。この漁法は、1枚の網を海中に立てて、網の目に魚が刺さるのを待つもので、網の目を小さくすれば小さい魚も獲れるが、大きくすれば大きな魚だけが漁獲される。この網の目の大きさ（網を引っ張ったときの最大の長さ）を、「目合い」という。

これまでの調査結果から、通常の36センチの目合いでは体重3キロ未満の未成魚が全体の19％を占めていたが、39センチに拡大すると14％に減少し、さらに45センチでは未成魚が漁獲されないことを解明した。

漁業者は当初、「目合いを大きくすれば、漁獲できるキアンコウが減って収入が減るのではないか」と心配していたが、大きな目合いでは商品価値の高い大型魚の数が増えるので、1操業あたりの収入は大きく変わらないことが分かった。

さらに、目合いが大きくなれば、網に絡む雑海藻の掃除や修理に要する時間が半分以下になるなどのメリットがあり、調査に協力してもらっている漁業者からは好評だ。

これまでも、風間浦村を中心に2キロ未満の未成魚を漁獲した場合は再放流する等の取り組みが実施されてきたが、刺し網の改良試験等の技術開発・普及を通じてさらなる未成魚保護に取り組み、資源管理につなげていきたい。

（水産総合研究所資源管理部　竹谷裕平）

東奥日報　平成28年8月26日掲載

この記事は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。